

Title	女性ホルモンと子宮体癌
Author(s)	加納, 英男
Citation	癌と人. 15 P.23-P.25
Issue Date	1988-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/24039">http://hdl.handle.net/11094/24039</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 女性ホルモンと子宮体癌

加 納 英 男\*

女性らしさを保つのに不可欠な女性ホルモンと、女性特有の臓器である子宮の癌との間に何らかの関係がある事、想像に難くないと思います。もちろん女性ホルモンは、すべての女性の体内に存在する訳ですから、それが直接癌の原因であるとは言えません。たとえば、子宮癌のうち90%以上を占める子宮頸癌については、最近パピローマウイルスが原因として有力視されており、女性ホルモンの役割はあまり重要視されていないというのが現状です。ところが残りの10%弱を占める子宮体癌については、女性ホルモンとのつながりが問題とされており、特に治療の面から癌とホルモンとの関係が注目されています。そういう訳で、ここでは女性ホルモンについて説明しながら、子宮体癌のお話をしたいと思います。

そもそも、一口に女性ホルモンと言いましても化学的にはいくつかの物質の総称なのです。そして、それらは卵胞ホルモンと黄体ホルモンとの2種類に大別されます。女性ホルモンをつくる臓器といえば、まず卵巣ということになります。卵巣の中には卵細胞を中心にした卵胞と呼ばれる部分がたくさん存在し、ここで卵胞ホルモンは作られています。一方、卵細胞は月経と月経の中頃に卵胞の外にとび出してしましますが、そのぬけがらが黄体と呼ばれるようになり、卵胞ホルモンのみならず黄体ホルモンも、そこから出されるようになるのです。このようにして月経開始後約2週間は卵胞ホルモンが、その後2週間は、さらに黄体ホルモンが追加されて、体内にゆきわたるのです。なお女性ホル

モンをつくる臓器は卵巣のほかにも副腎や、脂肪組織があり、閉経前は脇役ですが、閉経後に少量の女性ホルモンをつくる時には主役として働いています。さて、この女性ホルモンが体内をめぐり、女らしさをつくるのですが、何といってもその作用が最も顕著にあらわれるのは子宮なのです。言うまでもなく子宮は胎児の育つ袋であります。その袋は硬い筋肉の壁と、その内面をおおい、月経出血の源となり受精卵の着床する場所である柔らかい内膜とから構成されていると考えればわかりやすいでしょう。そして、その子宮内膜は卵胞ホルモンによって増殖をきたし厚くなり、黄体ホルモンによってその増殖は止まり、受精卵着床のための準備に入ります。卵巣の中に存在する卵細胞は将来自分が着床するために、卵胞の発育を介して女性ホルモンという情報を子宮に送っている、つまり着床のためのベッドを子宮内に予約しているとも考えればいいでしょう。又一方で卵胞の発育は脳にある神経細胞のつくるホルモンによってコントロールされているのです。このように体内の各細胞は、いろいろな情報のやりとりを通じてバランス良く生きているのです。そのような状態にある細胞を正常の細胞と考えると良いでしょう。逆に、そのような情報に従わず、周囲の迷惑をも考えず、かって気ままに生きる細胞が癌細胞と考えることもできるでしょう。

さて、女性ホルモンの話にもどりましょう。女の子が大人の女性になるための第1歩として初潮をむかえるためには卵巣から女性ホルモンが出される必要があります。実は、これをコン

\* 大阪大学助手（微生物病研究所附属病院婦人科）

トロールしているのは脳の成熟なのです。それでは閉経は、その逆に脳の老化によって卵巣を刺激できなくなったために起こるのかというと、そうではないのです。閉経は卵巣の老化によっておこるのです。卵巣が老化して働かなくなるため、脳からの卵巣を刺激するホルモンは閉経前の10倍にも達してしまうのです。いつまでも女らしくありたいと頭の方は一生懸命がんばっているのに卵巣がままならないというわけです。更年期女性の症状は、この思うにまかせないという無意識のうちのイライラが原因となっているとも言えるかもしれません。このようにして卵巣が老化し、女性ホルモンは出なくなり、子宮の内膜も増殖を止め、以後は出血をみなくなるわけです。もし閉経後何年か経って再び出血が始まったとしたら、それは子宮体癌の最もわかりやすい症状であるのです。卵巣からの女性ホルモンが子宮を刺激していないのに、子宮の内膜細胞が、かってに増殖を始めたというわけです。もちろん閉経後の出血がただちに癌という訳ではありません。最近の寿命の延びとともに性生活の期間も延びているようで、閉経後5年、10年たつて卵巣や子宮は引退しても膣の方は現役で働いているわけです。もちろん膣も女性ホルモンの存在によって、はじめて良好な状態を保つ事のできる臓器ですから、閉経後の仕事は酷であるにちががなく、老人性膣炎をきたし、そのために出血をおこすことも、もっともだと納得できるはずです。どちらであるかは検査をしなければわからない訳ですから、とにかく婦人科を受診して下さい。幸い老人性膣炎であれば、女性ホルモンの投薬で、性器における様々な不快症状が改善することも多いですから、率直に医師に相談してみるとよいでしょう。たとえ癌であっても子宮体癌は子宮頸癌に比べて進行がゆるやかで比較的早期に手術できる事が多く、治癒の見込みも高いですから、躊躇せず受診を心がけて下さい。さて、ではなぜ卵巣からの女性ホルモンが出ないのに子宮内膜

の細胞は、かってに増殖するのでしょうか？ 残念ながら現在のところ、この問いに明確に答える事はできません。ただし、いくつかの説は考えられています。たとえば、子宮体癌の原因の一つはエストロンによる長期刺激であろうというものです。この事について少し説明を加えましょう。先ほど述べた卵巣ホルモンの中には化学構造がよく似ていて、ほんの少し異なる、エストロン、エストラジオール、エストリオールと言う3種のホルモンが存在するのです。このうち閉経前の主役はエストラジオールなのですが、閉経後はエストロンへと主役が変わってしまうのです。このエストロンが長期に作用すると子宮内膜の異常増殖につながると言われているのです。そして、その源は脂肪組織なのです。一般に、中年以降の女性の下腹部は脂肪のたまり場となりやすいようです。(そうでない方のいらっしゃるのも事実ですので、念のため・・・) 従って、そこでつくられるエストロンの量も多くなるものと思われまます。そう言えば、子宮体癌の患者さんには、肥満・高血圧・糖尿病などが合併している率が高いという報告もあります。思うに、これら諸悪の根源は肥満と考える事もできるでしょう。実際には肥満女性すべてが子宮体癌になるわけではありませんから、この説だけでは説明がつかないのです。肥満女性の方々は、あまり気に病む必要はありませんので、ご安心を。ただし、いずれにしても肥満は成人病のもとですから気をつけましょう。

ところで、癌はすべて自覚症状の無い時期に発見する方が良いわけですから、そのお話をしましょう。従来子宮癌検診は、子宮頸癌を対象にしていたのですが、最近生活様式の欧米化とともに子宮体癌が増加しつつあるため検診の際に体癌の検査を、あわせて行う場合もあるようになりました。具体的には子宮の奥に細いプラスチックチューブを入れて内膜の細胞をとってくるのです。癌の疑わしい場合には、大きめの

耳かきのような別の器具でさらに多量の内膜細胞をとってきて調べることになります。どちらも無麻酔で可能な検査です。もし、子宮体癌であれば、多くの場合、手術が第1の治療法となります。もちろん抗癌剤など、他の様々な治療法も行われます。

ここで、再び女性ホルモンの登場とあいなるわけです。つまり、先ほどの女性ホルモンに関する説明の中で登場した黄体ホルモンが子宮体癌の治療に使われているのです。黄体ホルモンが、卵胞ホルモンによってひきおこされた子宮内膜細胞の増殖を止める作用を持つ事は先ほど説明しましたが、これはもちろん正常細胞についての話です。ところが子宮体癌の中には正常細胞と同様に黄体ホルモンによって、その増殖がおさえられるものが存在するという訳です。この薬の特徴は、何ととっても副作用のほとんど無いことです。もともと生理的に存在する女

性ホルモンの一種であるプロゲステロンと呼ばれる黄体ホルモンの誘導体ですから、当然とも言えます。しかしながら、他の抗癌剤において副作用が強く服用を中止せざるを得ない場合のある事を考えれば、ありがたい事です。

以上の説明で女性ホルモンと子宮体癌とが関係の深い事がおわかりいただけたことと思います。さて、癌細胞というと何か正常細胞とは全く異なった存在であるように思われますが、その中には正常細胞と同じようにホルモンに反応するものもある事を述べてきました。では、癌細胞の癌細胞たるゆえんは何なのでしょう。この問いに答えるには癌細胞を細胞社会の一員としてとらえ、細胞社会のおきてに従わない悪人の性格をもっと詳細に調べる必要があるのです。副作用のない理想的な癌の治療法の開発のためには、このような基礎的な分野での研究の積み重ねが不可欠だと言えるでしょう。

